Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

1412
1
13

門 1412 巻 1

天保九戊戌歳七月

伯州米子 錦海船越敬祐著

繪本黴瘡軍談 全六冊

浪花 烽山重春畫 藏六亭藏版

予カ友船越君明業醫ヲ内外諸科典レ不ニ兼通一而最善ク攻ム黴毒ヲ所在施レ治ヲ亦以レ此ヲ為レ先ト人目ヲ為ニ黴醫一蓋テ此ニ症治方ニ苦心研尋二十年間遂有レ所ニ發明一云嘗テ著ス黴瘡

瑣談徽瘡雜話等書並皆
國字爲文摩痕指方詳審
靡遺其意欲令徽家易讀
易解親知方劑當否調理
好惡而不隔皆醫毒手也
獨奈輕薄子第不喜是等

誠言實說之書讀一過則
拋擲無顧君明察之令復
著徽瘡軍談專做小說之
体摩病藥交戰之狀其事
奇怪其文工緻雖彼輕薄
之徒手一把之終不能釋

玩讀之久會當了得此症
治方取舍利害君明用意
可謂深切哉方今小說盛
行書坊叢版月倍日增概
之皆是浮靡猥雜縱立勸
懲之說暗用誨淫捷徑讀
之無益不如不讀若此書
則不默假于寓言歸於實
用巧手設善方便真有益
於世之書也其或徒讀徒
玩以為尋常小說之流者
則非君明意矣

天保九年戊戌三月

櫟陰散人

浪華　森晋三書

述意

予此著述とする所は強て名聞を弱んぐ為にあらず熟苟世の有さまを
とりて癰毒を患る者往往落葉の如く真実病を治せるの云
ふ所は世の好醫育醫のたゆまず怠まず遂に不治の疵となりて生涯
を誤る者猶多くかぞへつべくしかれども単の愁ひと解き因不実乃
医者の好育と辨別し病者をして其毒を除らざるしめんを
欲して鄙陋を顧ず此草紙を綴りて世上に布くものなり凡
癰毒とうまとする所は其身に元より邪気あり天稟乃
毒あり故に癰毒あるものと交る附ハ其邪気天稟の毒と和
て身中に流注入りてあらゆる府腑毒淋疾等と發ずこの附ハ
唯患る所ばかりに毒あるばかりに天稟のごく

ある人へいけ邪気をもつぐるゆゑ
易きゆゑ鹿瘡麻疹などのごく其初發熱気甚しく気分
けつく不食なる者の若ことゆゑ扨又鹿瘡麻疹などのごく発
発するともなく又治なるゆゑ
けもあらべ起立くも働くこともなりがく左右なる間次第病
おとり遂ゆゑ癈人となり或ハ癈労などの不治の症となり劇
症となりて若痛日久しくして発なる者又多くかゝるあて病しき
病なれども其初發熱甚しき若痛なけれバ危角之分揚
といふくしに苦ハ忙しけれバ体んぐ居る癒治ハなるぬ強き薬ハ
瞑眩ぐいやぐや粉末ハ欲なくひ美薬ハ面倒なる傅薬ハ膏薬
くふう治るゞよ仏法ハのまべゝ居られぬ魚肉と喰ねハ飯が

喰ねなどく気後のあるたけてい
元気の人ハいろなる料簡ぞや病ハ其身の敵なり我身と大切
とおりぐ之敵となる病とハいふたりて其ゝ哲附の
不自由といふく生涯の若痛と遂ゆゑ其身と喪ハ悪病
とやいそん宣気とやいそん自滅ゆかゞ養生の病人多け
れバ好医附と得く世に夢り巧言令色辯舌とく病あるゆゑ
ハり治療とるゆゑ始終病人の撓姪と料りて適当の治とるゆゑ
別て鍼毒などハ瞑眩刑の功あるとゆゑ病人のきらふ
こと仇寇して種くの言と設けゆゑ仮薬ハ人をして逆上せ狂粉
生く乳とりぬるゞ治ゆゑかるゆゑ茅ハ剤などハ因その効あり
ても毒茅なゆゑ茅毒のゆゑて後ゆゑ害となるゆゑなどいふことを

を用ひざ毒にも成りぬもの〜ぬ金瘡の膏剤となる人て久後せ〜め若熱あるべ後つとさ四肢腫脹といるべ其いてこと治〜痛いえんば膏薬とあ〜又い所定丸と用ひく一附の骨痛とたとけ只枝茎のこ所州り除きて其根本と治せさまべいりとも全治さる期いるたりたとへば下痢又は傳茎洗茎膏茎などと用ひて一旦其処いるとまども又変じて便毒となり便毒とるとせば膏痛となり骨痛とるとせば揚梅瘡とるり揚梅瘡とるとせば瘰癧とるりかくのごく稚くに変じて後は改面と腎背腰後るどふ凝結〜其処稚いて〜或い腐爛膿坎流癈膿と称うぶこと所消こ茎と旁らだして茎所用るふいるるなり其本といへば病人の腫脹にして身体もといと本実の好医ゞ遍歯の薬方と用ひず只枝茎ふの病と治して病者のみとうぐさ先金瘡の薬と久後させて薬礼と貪るとふよりてなり仕のごとに好医浪死るどにい別て多〜又一稚育医るる者ありて稚粉生〜乳そひるぞれかるやふ〜ふ考る第三剤笛の用ひ中〜とそ〜だ右の内二三方と変とう毒り日浪ときらめ仕切茎と号してこまとあ〜人と混ること多きゞ中人にいよ〜世上の越ひと惜に夫稚粉生〜乳ふい酷烈のりのるまでを毒りにこれと用ひるとに害とるるとふるう〜だ青長茎黒樹ふ方と扁鵲と許にこの禁ふ方とい蓋稚粉生〜乳ふの劇薬の方るど加減の法とそ〜だりて妄と用ひるこに害とるるゞ中人こと医てかるだ〜人ふ許さだる所以く禁ふ方とのとある一大医湧ふ方並ふべ稚粉生〜乳ふい加減の法をそ〜ぶれば用ひ所以若あ〜だ

今附ハ育醫洛ひきゝれこまを用ひるゞ西〻之療法の業をこれ
を知〻一角の毒素ありとおもふ悪むべきの甚きふあゝ〻ゞや
若この粗粉生〻乳等の加減の法を知〻くこれと用ゆるたいら
ゆゞの癇疾結毒ありとも忽に治ゞ能ハゞ平ハらの法也と
以〻嫩治能用の方剤と抑嫩毒と粗粉生〻乳與業ホと用ひ
ざるて心脳未の悪ぜざるとのこハ行とのゝ〻治ゞ能ハゞ治ゞ偶其
害あるハ育医の然ゆり業の害ハたゞ〻又好医の妄言ゞのみく
粗粉生〻乳と濃ロ病家と相悪をるゞごとゝたハ霊業の流通を
さゝ〻げ治療の機械とゝ〻ふと其羅甚ゞ大ひゆり病去
よゝ〻ゝ〻ゞ考〻〻粗粉等の竭害とゝゞハ全く育医の過
あるゝとゝゞり好医の妄言ゞ相ゆるまゞゝゝゝ

の疑惑と再迎く世人に告示さんがために病と業との悪不
忽と軍の猜員ふ除〻〻方剤の加減と述べ明ゞこと此
書ゞ熟讀ゝゝる附ハ自〻嫩治の運庭と落んゞ初り
育醫の誤治と免ま好医の悪汁に陥ることゝゝん
ごゝ予ゞ流世の微志ゆりと云ふ

天保九年戊戌六月　　船越晋識

凡例

一　此書ゞら通信を要とゝゝれハ文河の畢題ハ勿論偽名づゝひ
の違ひ等多かるべ〻看人ゝゝゞ察せよ

一一部の俳諧全く小説軍記に倣ふ故に交戦のいとはしい猜疑の状況某お攻るふるこれ戯著の常俳なり

一流季の俗徒奇怪のるゆゑ邪ざれが悦び故に今も俗間の行つゝ三国妖婦傳るものと假に見ひく悪狐の怒毒纏毒をとり雷震等の神霊延寿丸等の業とするとくごとく妄延の上に妄延を加へこと全く附俗の悦びと邀へくるの書所製漢せ〜めんがためふ〜て奇怪を述るとゝ以て將意とするふ邪ど

一毎國病賊某軍を配常をるものハたゞ其大概に後人強く株を守ることゝ

繪本黴瘡軍談目錄

巻之第一

醫生燈前見妖婦

天神斧下退魔魅

會郊野群邪議事

變形軀五傑應募

巻之第二

試二舌戰一國王授レ任
挫二奸謀一賊徒伏レ誅

巻之第三

襲二敵陣一遺毒喪レ首
失二本營一瘰癧晦レ迹
血熱敗二走黄泥阪一
下痢減二亡陰頭山一
養二元氣一藥將緩レ戰

拒二鋭鋒一病賊殞レ命

巻之第四

延壽丸矜レ勇取レ敗
黴効散定レ計討レ敵
両雄連出究二苦戰一
一將獨進鏖二衆敵一
大元師計平二賊群一
俱生神来報二國亂一

巻之第五

活枯回死巧手段
遂功全名大團圓

目錄畢

附錄壹巻

懲瘡雜話

病賊 黴毒大王
びやうぞく ばいどくだいおう

藥將 延壽丸
やくしやう えんじゅがん
藥將 治瘡丸
やくしやう ちさうがん

黴瘡軍談卷之第一

伯州米子船越敬祐著

醫生燈　前見ニ妖婦一
天神斧　下退ニ魔魅一

夫天地の間物各相對あり所謂天あるべ地あり陰あれば陽あり暑なるべ寒あり男あるべ女あり乃至善惡邪正等各対待之理なり人の病と雖も其中某と病とハ疾病なるべ某方亦如し

某の病なるとハ上古之疾病なるべ某方亦如し

末世之ものて疾病多けるべ某方亦多し蓋黴毒の一病ハ

古昔此名なる人元明の頃より此病といふ者あれども其治

彌洋なるべ明の陳司成なるべて黴瘡秘錄と著し治方

効驗を挙るの精精旦病源を編じて嶺南の地より裳るとて
まより未だ繼ひく先を編ぶるの医とて未其的方を得
者と呂ど友よ篤実淳亜とて若あり勇て黴毒の治療ふん所
労〳〵惜く究め善渉りてや〳〵其方を自得〳〵いまゝこの素剤を
製造して先を世に弘むるとも世人こゝ庸医の言を信じ
狂粉まゝ乳の劇剤を異を請るのハ多くして効ひる者ハ
おのゝ淳亜に情きことをひ何とぞ玄妙の方を搜り出〳〵黴
瘡治の妙を孤さんと人を避て一室に引籠り廣く方書を
研尋して弦ど寝食をとるゝふる者病いつものごゝ殘燒
の中に独坐〳〵思惟沈吟する事を忽ち一陣の冷乳孔を侵〳〵
て人の骨を刺るけらひす淳亜ハ不思議に驚ひ眼を定めゝ

見上れば一人の婦人黛ハ二八ばかりにて白玉の新丹花の唇眉ハ
三日の月よりも細く腰ハ二月の柳よりも嬝なりなける美麗
を細の袴のひたをとくと引き出ぐなるさゝ一つび顔ハ
城をも傾くべ一二び都をハ國をも傾くべ〳〵婢娼窈窕と
て百の媚あるまかざ〳〵なる樣ハ風の張り淳亜に何こて見ハ
とゝ〳〵ひ妙なる者なるとも汝ハ我と為る時ハ我こそ見ハ汝
と攻戦する黴毒の精灵なり亦毒力とのゝ〳〵汝が此あいぐの
結構と知るりよりて先利害を說さと及ば企を止めて先
蓋の苦労とおさ〳〵めとゝ〳〵ゝ我が
上の次ちとひ実ハ尽〳〵抑乾坤寔寔の附況沌の一乳
そぐゝ多を生を淫ぐ性さハ舞りて天とるり渦りて帝ハ

海うて地となり平和の霊気は人となり逆鱗の帝気は禽獣
となるこゝを平和とは不正の法令の凝る所にて寂寞の未来救
と称するの計べうべきにあらず爰に九尾白面の狐とゝる
神変自在あり〻〻昊〻宵の間と飛行して忽ち漫も
なく三世の外に遠徹して元来邪気の凝結
する所なれば大極の一理に帰するの能ゝ無念無〻朝〻毅
つてあらゆる世の人民を殺し一切国土を魔界となん
のとゝ思ひ立しゝが唐土に生りては殷紂の時に南りて冀
州の侯蘇護が妲己と称して軀殼に入かゝり紂王の妃妲己となり悪
虐を勧め改革を乱し邪佞を用ひ忠諫を斥ぞけ酒池肉林の淫楽を窮め炮烙蠆盆の厳刑を制し蘇妲己

と義里獄に牧囚し姜皇后を搦て擒里楊に磔し伯邑考を
殺して肉醢を臨ふ〻〻主を殺し内を割き外骨を砕き
を殺し孕る女の腹を割るなど其数を尽すに此のごとく世代乱し人
と称して我が所業成就せんとせしかゝる西伯姫昌の子発一度怒り
く天下かゝり氏を吊ひ逆乱伐の兵を挙げ尚雷震殷郊の
の英俊を結け天下響のごとく奥じて諸侯朝せざる不令集
数万の大軍向に不敬の都城も攻落され紂王も焚死
基に焚死し我身も雷震に生捕れ刑を斬鉞の下に死されも
妃俸は潔く縊死し妃は自刎して周徳の新政なして
聖主賢后和合なるこゝは其間と何ぞ能く遠く西天に飛去
花陽山の麓百姓の女となれ宮名色とのゝ耶猶忠類王の妃と

りょうと上と蓋憍して法の悪るものとなるにめ出ぬより仏法と破り
人民と殺し奪さんと先ず屋舎を焼き殺さんと百王の首を
きらんとせしに王ようさいの法験と我が妖邪を折く
病と変着ぶ珍縁を幸仲と探りもとめ金風ようの業を樹
と持り来り来りて無しめ苦痛まさりて堪がたく苦しく
宮中に二尊の新宮あり仏の威光我が妖邪と思へ忽ち幸相
と成られ徳と命ず通をとく龍さうぶもをそれ天竺に返るの
かるべきより日本に流り堀河院の小面坂部行綱がもと
宮中に居まとく島羽院の寵ず玉藻前と呼れるいうを
日本と魔界とさんとおもへども神国なれば人の心上下をふ
くしたやとく西域勅ゆるると博じさしべ天竺の命とちぐめ聖

統と絶して世の乱とりおさんと玉体を悩せ奉て安部泰親
神筮と仰く我が妖邪と知り法験平癒の祈をと号し泰山
府君の法と修せしに悪獣の本体と成られ大内を去て下野国
宗須野の原に隠れそこ隠まと人民と魅惑をるふ故なり
時勅命によりて泰親再ひ調伏の法と行ひ討ものとして三浦上総の介
宗須野に迫ひ詰ひと雲の如くに攻ると雖も
調伏の法験通力とあらん武勇の英雄射伏せられく数百歳の
寿命一時に亡び屍と原に残さられうさまじく悪獣は怪なりて彼此
原の石と成り毒気と成り人畜の命とうばるるの数多れども
も往ものく玄翁の禅杖と碎まと悪獣亡び親殺せしが唐土霊鷲の地
小地おく再凝り集りつつ思ふと有待の形と傳る附ん光滅をの

朝あり元祐の病とうなばくく砕焼の害と免ぜ皮肉の中にかけ
ハつく一人で結毒ん又人氏と親〜ゑさんと疑きゑあゝゞと遂徽毒
とうゝ一種疑治の悪疾となり八万四千の眷属と引つゞ二万ゑ五千
渡り者に人ゐふ出入帝を賢ゑ愛るゝゐ神明仏陀と
悔ることゑのとり不測の通力とそゐ（張敷徳顕自在とゐ）
なゞべたというゐ霊験なりゝも我ゞ所治せんとゆひ
もうゝゞ益威勢と振ゝ不明の陳司成ゝめて我ゞゑ敬対
して徽瘡秘録とゝ書と著ゝ生〜乳と欲く十二方紀毒丸
を撰むゝ万病回春ゝハ五宗丹とあゝゞ外科正宗ゝハ紫金
丹とあゝゞ其後日本ゝそハ明ゝ和年間ゝ橘為賢徽瘡澄
治秘録と著とゝ天明年中に浅井紙後守徽瘡約言

とあゝゞゝ元禄元周徽瘡新書と著ゝ文化年中に石
橋忠庵徽毒要方と著ゝ杉田玄卿ハ徽瘡新書を
著ゝ其后諸家の著述多けれども行きて実験究理の
書ゝあゝゞ学ばとのゝく著ゝ不ゐれば畏るゝ皆ゞ陳司
成我ゞ眷属と攻めゝゝ治療と為徽瘡秘録ゝ元治
の功績と称ゝとゝも我ゞゝゝ外科変不測の眷属多ゝ若先生ゝ
出遊ひゝゐば陳司成も治療ゐゝゝ郷ゐゝゝゝ五宝丹紫金丹ハ
あゝゞれの良方ゐゝゝゝ我と見ひく速効とえゐゐ甚おゐゐ
ゝ疫ゝ疫ゼゞる者ハ効もゐゝゝゝ成と費ゝゝゝ猶庸庵ゞ徽瘡秘
ゝも五宝丹を待ゝゝ此猶庸庵ハ我ゞ畏るゞき者ゐれども中年
ゝて世とゝゝゝ猶浅井ゞ翠武ハ且の偶中といひたのゝ武ハ

淳直書室ニ妖婦とゝ名る者雷震来つて淳直と助る事

ぞくぞくだいこう

書籍

書籍

書籍

ぞくぞくぞんちゃく

ぞくぞくだいこう

らいしん

ぞんちゃく

元論の空論ゆゑ孔子孟子はいはゞ学
多枝ゆまろ也紀毛人の鄙とゆとろ夫と書物ゆかたあゝし
なるまでわゝ国さうの用ゆハ方がゝ仕ゝ石橋ハ生ゝ乳の
効と称ゞ頗法ゆかゝとゞゝなきとも治方ハ知ゝ解ゝ
元近我ゆに敬とる者世の者の病と世りゆゑゆ全治の功とる
ざるなり茶ゆもいゝゞゝ張敷頭顕の脈と見ゝ又猶ゆゑけゝ
九穴と屋めゞり作稽作いゝゝ此ゆ在らとすゆゝ彼ゆあり
或ハ智治とるとゝ也ゝ幸数とゑゝ再び数るかゝる自在
の我れるゆゝあゝゆる名医ゞ已とゆげ舌と書ゝも理ゆゝ
やゝゝゝゆハ治ゆとゝゝゝ獨毒と亡さんと法ゆゆゆ離とて見
とゝゝゝありもせざる方某とゝるね治御ゆ夫ゆゆ学ゝ愚ゆ

愚ゝと謂べゝ今より獨毒の医療とゆ敬対の処方麁ゝ
さハ長ゝ法ゞ猶と守り幸病長命なゝしゆん若ゆ迷ひと
とりて法とゝゝゝ我れと欲せんとゆゝゞ災害後月と移る
ゝゝゝ法ゞ命ハけ産ゆ法らんゆと定めていゝひとせよと
懸河の弁舌よゞゝなくさもたゞゆゝひのゞたり薄典ゝ
づくゝゆゆゝ大息つゞさゝゝ法ハ若ゆき悪孤の夭ゆゝ
ありけるゝ法ゝゝゝゝゝゝゝ悪ハ若ゆき猪ゆ能ゞゝ邪ハ若ゆ制せ
らる法ゆゆゆ三国ゆ横ゆりて諸の悪とゝるゝとゝゝゝゝ遂ゆゆゝゝと
ゞげざるのゝゝ果ハゆの身と亡ゝたりゝゝゝ猪さゝらゞゝて悪魂
こりて病となり世の人民と敬さんとハ法ゞ性とハひゝゞらゆゆ
ゆゝとゝハゞ執ゝ法ゝゝたゝひ不測の術と仮ゝ獨毒の病ゝ知ゝ

天下の廣大宇宙の大ひなる元始の奇方をうゝんやとも
けれども中々に奇〻怪〻なる性を立うり大極の理を隨順し運行天
地を共ふるとゝ若惡を止めて善を行ひ人氏と性をとるべし我を
亦は上丹緑と願ひて遠ゝ妙方を授ひ毒惡を去
ひ〻ぎ永〻病根を絶ち尽し一生福福へ天ふ行り
海の力ゆゑんや元因の舌の根うごかさんとうゝや立玄玉と
いひもてざる婦人の新色忽変じ眼幽ゝ髮逆立
淳無邪ろゝとにらみあゝまぐろき一言うゝ寂蘭已来凝り
塊り〻我が一毒海の教海ゝ蠢らんや我玉と好意とのゝ
利害と深〻ゝ海られと判ひど我玉とあぐせんゝ思い
の外の底者より今元海とうり敷して後の形魔とうゝ

べゝ覓順とせよと花かゝや淳亜ゞ繋ゑゝ宙ゝ引立
くはり毒気と仕くゝ力ゞ綱ゝ家ゝ雷震動し
不祥の惡臭宮門ゝ漏ゝ出ゝ同鼻と然へいゝも
の淳亜ゝ体もくゝ力とるゝゝ己ゝ危きそのわ
かゝ一眞の雲霧緩慢ゝて意ゝかゝ赫くなる環光ひ
らゝと離〻〻跳り出ゞ〻なる人の大將分の丈九尺有餘
大眼洞面色能すで赤く連聰蒼毛左右ゝ多見ゝ以ゝ黄
金の兜とゝ〻ぎ分ゝ連環詩金皮の鎧と穿ち百元獅
鋪の亜意と元下拓紋桐宮の剣とゝ元獅子の番ゝ弓矢と
うけよ長柄の開ゝ斧と手ふり一言の宿言ゝも及び妖怪
の頭とゝ〻微塵ゝ元れゝ手対ゝ付ゞゝやゝひけん

龍雲のごとく身をかつて窓けやぶりて空に飛上り渦巻立
たる雲の中よりやとき渾亜惟こきけ今五穀に奴なれども
我ら怨敵の未だ出ず魔王なりてそこうるとびけ場へ此
道に入り遠うとび出のひそうせんとて御次第に遠ざかり
行のれども今消失けり其時渾亜惟彼大将の手に取をさげ
僕妖怪に脳されたる非命の死となさんとせ〜に将軍のなさけ
こうして不思議の命を拾ひ再生の恩謝しまるに親を〜
僕いまぞ将軍と懇らび拝いうる所方なるぞ孤くは大事所
あるこせ玉へと涙んぐのべけるとば彼大将うちうなづき不審なる
我こそは其昔鹿島の合戦に殷の大軍と切るびけ勇猛絶
倫の名とりる周の武王の后雷震子南附彼妖怪は姻己

どうして殷宮とあり我ら並と云るゞ四〜ふ今狂異ること
此のごとし我ら思ひ今天界に生れ帝宮守護の神將こう神通
と称く今宵先生の危難あるを知り怪と第く必死と飛入
先皆因縁あることなり後ろ〜に統ぶ〜今先生を奪ひ
て彼悪霊を屬が所在つき知き其ありさまを見寄せ〜見度
ものとかさらんと欲ば我ら〜を踏てを第玉へ〜とせりこれを
渾亜惟再縁かさねぐの西あこいぞ作せ度ら〜ば此度
酒〜べ〜と立ってこび〜〜獅の神〜とり付くと庄〜と云く
先とゝ引つけ庄〜と巻くまを縛くにたるこび雲再び毒ひさぐ
二人の辯と引色を清風聰こうて御手を起り雲を吹上げうたる
びけ虚空るうに立り移く

會郊野群邪議事

變形軀五傑應募

かくて両人ハ雲に跨て風に御し其疾きこと矢のごとく須臾の程に数百里をはせさり風もやゝおだやかなれバ雲を踏とめて暫息をつぎ居より仕付もしらぬ道行に淳吏ハ國の根も合ず若もこゝから落なバとて愛宕山の土器投畷塵にするハ銀ひばあら恐しと思ふ程肌粟立ち使ふる息を潜して雷震が纜の袖のちぎるゝぞろ継り抜きなるありさまハ龍の尾につく蠅の首纏るに髪髻なり雷震ハ淳吏を弓手の方に引退先生聖るもする間に雲ハ我が宗物なれバ落披乱だるひ此ともに此下こそ彼悪灵の主領眷属集りてまかさらぬ知るなり心得たるめて

見聞し玉へといへれバやがてふいづれ纜の袖ハ離世が総様首ハ定まらじ雷震に雷と思し迚せく雲の端より新芽出下界遥に見おろせバ地ハ何国と知らねども蒼茫たる広野の上に織笈の妖気集り中央にハ黴毒王と覚しく黴色の衣冠を着し威風堂々としてあたりを掃ひ座とし名たる傍にハ眷属の諸大将上攻瘡毒と延めとして瘡毒痃痎瘰瘍下疳遺毒投兼瘰癧結毒痔疾痔漏便毒痔瘻楊梅瘡癰下疳早成骨痛筋須肉下疳疼淋病白濁膿瘡痲痺職らんど一諸当子ののどども谷数万の眷属とひとつまた或ハ青或ハ黄或ハ赤白黒なてくさまざまの装束に出立て列を乱さぬ並居たる黴毒王勿元来し我ハ汝等と共に此日本長崎丸山の娼婦の人体にに

君びへ〜より女侍まより男侍まより女侍
まを移り今日午六十餘歳の人侍まを通路の自生と乃うさ
まども異域の人侍まといるかからう豪貴のまを八逝より經うう
志が我まを弄術をのつく一人の美女と化し先を始を福徳
自生湧門ゞあの稱元とうり色とのりくこを所繰より
まをとそのまを貧を代丁雅小者をいる近我ゞ容色をこころと
逝〜神樂ひろぬりのもを□のとうまをこそふるび
きに祝をおち家内上下一人も疫毎を枕とかいせども我ゞ
術にて〜まさを主八下人の上所志〜び下人八主の上とそ〜び
我をのこ独うの女といひうゞ〜たりとのこ思ひく〜て夜も
かゞさび交るゞどに天稟の毒の爰動すをを伺ひ我ゞ経美

体中を悪びへりさそ汝等とさそひへまとつ忽彼家と出ぐさう
捨の形八溺〜たり程なく彼一家内凡我まと交りし者嫌疑
と爰せざるハなく或八下痢或八腸胃疾或八内下痢
或八悩悩下痢或八袋下痢或八脚痛或八筋骨くまいくみ
却而苦〜絶〜腐爛して猪み流れ
出ぐ痢ふつくなりて肯をあ〜ふ〜
或八嫌眼或八沢痛或八温熱にくり
ぢめらまと或八疥癬鳳瘡を皮膚と
やぶられ或八咽喉腐爛疼痛を以て
食乃の毒跡を固めらまと或八痔疾
紅門腐爛疼痛とりつく大仮の毒跡

淳直雷震と魔所ニ至る景
ぐんちくらいしん
ましょ
いたる
ぐんちく〜大王
ひぐんきてこね
がんぐきらくうね
えびてこきうごうず
ういげうんひりく
上ごうけうく
けつぐ〜うんら
らうそくげうん

べんぎくれんろ
ちーうぢらう
りんぐ〜うぢうね
るいれきそんろう
げうんそやうろ
やうぐ〜きうひろうり
いぐうねけうね
一ノ十二

と悩さまで粥〳〵を食し体羸瘦し飲食すること能わざるより
労熱の法と移り肺の経の病せんして後と出さず獨労熱
の症となり何まても亡び失せんの遠近あるべかゝ一附まあまた
乃人体まと亡さんいと快きうまあるべや自愛まいあゝねども
皆我が方すの術と生ずう海苦るも乃病せるゝ山と大戦世とる
るゆゑまと言の下より上攻結毒列と出ず疫とをゝ作せ
の強毒まれり去るがら若人体生の主人公元と後剤乃
弱将と用いて効るれと懐り必ずときゝ初めて劇剤の利ま
とへまとゝ破釜焚舟の勇とるさば体方まと強徒とるゝん
大まの良策あるべかゝ〳〵じめ勇ゝん各いるとるんるまべ強
ゆの春痛器をゝ上攻結毒の言のごゝ後日の合戦ところ

りとる程はまとの以下和と赤く頭〳〵不ゆりと強うれ合
せ孫とをゝめ一度と耳汗出けゝう獨毒まい完尓とをゝひ
実と元の用ゆる社まども彼人体まい軍紛の国と同じ
かゝ〳〵世ゝ〳〵強流療治ゝたゝいまども五宝丹宝金丹
山帰丹刑亡物解毒湯撫風解毒湯温和解毒湯藍菜十金
大補湯獨中益元湯ゝの強根と形〳〵狂粉喫菓生く
乳そゝぴるぎ汚毒れかるゝ赤尓ゝ耳汗ゝさだ
て蛇喝のごゝ畏ゝゝりかゝまべ命い和るゝも劇剤を
用いて猜疑と附ゝまする剤ゝいゝもゝ抑又我業も劇
剤と恐れて人体まれへ迎ぎ合戦ゝゝがとたとひ劇剤と
生まゝう兵只強機と変に逆ひ或ハ避或ハ菌り彼が説乱

と性うしろ目と延びと肝要こそ元性粉生く乳なども勇猛
強烈の性なるべし其過ち不繚勃狼藉者しく却く忠臣の
敵となるべんを附一朝に攻め討なば猛虎とうたるべし
稚其朝に陣こそ我を分の術と称い庸醫の魂を
かりくを人公と称き悪く劇剛の法將と称ぶ
遠ざけて用ひざるべし内の妙計と絶千変万化に
そそのかべ今宵宮の写を小松く我を敵せん者と覚べ
なぐ者公望雷震が雲は其智とい勇とい我を上まさうく
恐しき者共なり今は天家に生れ文く天庭を護の武將ろ
我を先ん為寒渡率とうく医者が微塵治癒の工夫とるべと
心にて思ひ深と切じて救さんとせしが彼の悪人医

者と敬ひどころでなく我が姿と涙しかるべく通れ場
なり不絵形と形して思ひ敗を捨るの医師の乳と
なりてなるべん内は彼者も怨うと見べ海苔もよく
いつ内も乳づらひ長居は毒いざ海苔は者共うべ我れも
形と涙さんと産所立上るべ法者屬怪我の色面とあるべ
大事の妙策かくのごとしいうる劇剛が命のせ事も一銭と点ひ
彼し人体を亡さんとも程とあるべうこそ
さべ名年の不ましまうさるべんと内と凝る妖怪を獣
怨八方と敬乱しあり形は消失く荒野の事を吹去る風の
若のこ疑のけり浸率奇妙の思ひとは要者と形匂ひ微
毒を分中なる人体をといいるる如七絶形ぶ泡しし

玉へといへバ雷震驚かれ稚先生声をかさし〳〵然や人体生ハ卯れ
あらざれ即人の一身なり今黴毒王が十世ハ福衛司を衛つとらへ
昔の如内にて凡七十ケ玉の人体國彼悪魔が討に随ひ玉と後医
恐さるゝ己に経医名玉力を尽して平治の功を募まども只
庸医の言を信じ無用の緩剤を用ひるが為へに惟其動る所のこ
すらば病系甚に害ふるし今ハはや滅亡に近し我王天眼を
もて見る所彼生の旗生非園の滅亡を憂ひ主人公を説
さとし先生を迎へ軍師に進んと欲し追付此に来るべし先生也
も辞さるゝならば我王と共に太公望殷郊辛申伯邑考先
生と共に人体生に来り力を尽く彼悪魔を誅伐とべし先生よ
黴毒王がいひし詞を聞玉へるか宇宙の間彼が恐る者ハ我〳〵

なり昔殷の亡びし時悪狐ハ潜に抜出て西天に至り華
陽夫人となりしが我〳〵ハ前生帰りて太公望ハ普明王と
なり我王ハ耆婆と成り天竺に於て再彼を追退け其後
日本に飛び来り太公望ハ安部泰親となり我王ハ上総介
となり殷郊ハ三浦介となり伯邑考ハ那須八郎となり
遂に悪狐を亡し畢りぬ此のごとく彼と我〳〵とハ桐割の性
にして生〳〵世〳〵迹を追ひ敵対さられ纔なる日も先生も
前生ハ武吉と名づけて誤て人を殺せしが太公望の救ひ
を得て命を助り其上周の武王の臣となり殷の紂伐の時も
我〳〵と共に功を立てたり其因縁をもて今ハ医者となり
悪狐がなりたる黴毒と年ごろ相攻戦ふ先生に我

消毒と救ひ〜もかくるいとまなるゞ毒へなり彼人うい死孤
の毒疾となり人体毒に潜〜深く長く我ゞ業の害と免
まとなりと思へりされども我〜い天界自在の報とうけ出没
変易九のまゝうまとゞ今より奇効の業軍とゆり人体毒と
入〜彼毒徒と亡さん先業い延寿丸となり般部い微効散
となり幸甲い治療丸とゆり伯邑考い奇良湯とゆり古
公亶い祈毒丸〜考出せの新方とそひ惟業軍業
と助〜ゞ我〜力と勤る程ゆゆ〜ば微毒と亡さんゆゆの中此
物河ゆるより陽ゞ次ぶりの徒だ〜あつたれの慰こゆん業
く迚の業れゝと河もいまゞ絶らざる不ゆ下界の方より白
光か〜ゞ一箇の祈人白雲ゆ打ゆ毒ゆ潜毒ゞ祈ゆり

恭〜再拝〜業い福徳自在房つとい〜老の人体毒倶生神
ゆり我ゞ国の主人公毒ゞ微毒の魔ゆ衛ゞ変化の
美女と交りゆり一毒忍微毒の絨軍に侵さん其外の属毒
も彼美女と交りゆ〜い〜〜微絨ゞ憂苦ゆゆ業
久〜毒の主人公対治の策とめゞ〜せゞも戈ゞ考ゆゆ能
ゞ〜て庸医の言ゆ任せ薩弱の緩剣ゆ大持ゆゆゞ
補道の戦ひ練方一度も徒ゞ敗ゞ迫ゆ
我ゞ毒ゞ人ゆ思びず毒の倶生神ゞ合せ主人公
と流きゆゆ〜め先生と迚〜軍師ゆ宮ゞ彼毒絨ゞ追討
宮の先為ゞ〜ゞ〜ん仍〜拯代〜業ゞ〜ゞ主ひ
ゆ立ゆり帰〜ゞ先生房ゞ辞ゞ事ゞ入ゞ奇ゞ〜

かうんといふ細雨殿勅をうけ淳亜は雷震ごつに不ふる適苗すれ
べかりも雖ども雲ふるる神人を答給へ作の疾風ありぬ僕軍師の戈
をけまども奇りて居尚雷震等の技あり彼寡と共に貴
國をいとう及ばんなどもを賊とをけしべーとと雷震引ゑ
て忽易うまと光もうとごに諸大将と呼びそ一如ふ人を住らんと
ひさして立上り天を向ーとくあまねけば始も流星の道るが如
く忽然として数多の天神雲の上より飛ちり来る先ふ殿郎
其次ふ幸申其次ふ伯邑考ガー引ちりて天公望武ハ甲冑に
身をかくるる武ハ文官の装束ーてあるうせごーと立なーぶ雷震
ハ左右とりん在ーー人侍ふ向うんふ山形そハけ人ごうーび居ると
くへ迎ごーー先生まとりてごめまへと淳亜ごにの中へよとさ

いまー国の赤気と引出ーにふ兄文と唱まとバ淳亜がなの髭ハ
雲の朝日ふとるごとくゆりくと消失一具の色刃新ふるり
有やもあーびに立にもあーびに飛ひ自生ふーく物ふ落られ
ど岩石とも遠ひにごく岩るの中にも深ひ淳亜ハあき
まふ知きれてこハとも他人ふうりなるうふハ天人ふなりなるう
と新まと云まとく飛上り跳り起る其内ふ雷震とくごめ
殿郎幸申伯邑考ガ何まとも微細不測の形と変じ素気あ
なりふ給くなり去公望ハ風扇と上げいふ淳亜我と戦務
ふありまバ弱ーも天庭と離まがとなぐ神通とのりく
汝ともり且雑牛智恵と倩ふへ其術ふ変じて万るのふ不
貴と元ーわざーんに人の神将も淳亜と技けく功成

爭ひて一日もとやく亂陣せよさしづくと雲にまぎれ
ぐりやの虛空へと飛去アぬ俱生神ハ去ぬまれ極ひも
そろひ〳〵勇者勇將徽毒と亡さんと競ようけうるる
おく〳〵用意よくば打立ん人乃ちそなべはらんと雲と浮び
風紙記〳〵生出さんと出立バ人の神將ハ其跡よそろさびい
人仲出へとそなべたり

徽癡軍談一之巻終